三二七〇番

さし焼かむ　小屋の醜屋に　かき棄てむ　破れ薦を敷きて　打ち折らむ　醜の醜手を　さし交へて寝らむ君故　あかねさす　昼はしみらに　ぬばたまの　夜はすがらに　この床の　ひしと鳴るまで嘆きつるかも

反歌

三二七一番

我が心　焼くも我なり　はしきやし　君に恋ふるも　我が心から